

は し が き

戦前の中学校1年の物象で、北斗七星の動きを図に書いて出すという宿題が出た。私は私宅のサワラの梢を標準にして夜半まで眺めた挙句、あやしげなものを書いて提出した。後日の解説によれば、私の観察は問題外であった。北斗七星のヒシヤクと北極星を結ぶ軸が回転することは知らなかった。そうだからこそその観察だったのだろうが、あのばあい、北極星と北斗七星との関係に無知のままの宿題がよかったのかどうか、敗けおしみ九分で思い出すのである。

「パソコンによる天体教材プログラムの研究」を刊行する。小学校の天体教材の補助になると思われる。まず、同学の先生方のご批判ご意見をいただきたいと願っている。

ところで学校では一般に、教える側が教えられる者より有識者である。さきの例で言えば、物象の先生は天体の運行について知悉しておられたのであろう。生徒に観察の重要さと、発見の楽しみを味わせようという宿題だったに相違ない。しかし、不肖の者にとっては、結論を先に暗示されればこれ以後の励みにもなったという思いがある。一定の知識を伴わない観察は、いずれ無味乾燥なものになるだろうと。「……みんなで見てみよう」「みんなで考えてみよう」というだけの有識者の単調な呼びかけほどものごとを退屈にするものはない。天体は到底顕微鏡の視野で観察しうるものではない。したがって、小学生にとっては「日の長短」の理由とか、季節の生ずる経緯とか、惑星の運行とか、マクロの知識をうる事が目標となろう。コンピュータを働かせて小学生諸君の天体に関する知識が豊かになればこの上ないことである。

コンピュータ利用論議がさかんである。しかしコンピュータも教師の助手であるということが境界であろう。明治以来わが国では、「知育偏重」批判がつかった。読み書き・そろばんは大工で言えばノミヤカンナのようなもので、何を使うかは人によると、初代文相森有礼も言っている。教育は人間の完成を目指せというのは現代もきくことだが、学校が最少限分担すべきことは、まず知育ではなからうか。いずれにしても、学校の方法論の検討に熱中して、不易の目的を失なわないよう自戒したいと思っている。ましてコンピュータは、それ自体が小中学生をとりこにするところがある。授業の範囲を飛び出して、秀れたソフト製作者を生み出す可能性も持つ反面、推測や計算の能力を摩滅させる可能性もあるだろう。要は授業の主宰者である先生方の、コンピュータとのつき合い方によるのかと思うのである。コンピュータに無知な者の雑感を記してはしがきにかえる。

昭和62年3月17日

新潟県立教育センター所長

星 智 信